**降誕節第8主日　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　2025年2月16日**

**「この人を見よ」**

**列王記上18章36～39節**

**18:36 献げ物をささげる時刻に、預言者エリヤは近くに来て言った。「アブラハム、イサク、イスラエルの神、主よ、あなたがイスラエルにおいて神であられること、またわたしがあなたの僕であって、これらすべてのことをあなたの御言葉によって行ったことが、今日明らかになりますように。**

**18:37 わたしに答えてください。主よ、わたしに答えてください。そうすればこの民は、主よ、あなたが神であり、彼らの心を元に返したのは、あなたであることを知るでしょう。」**

**18:38 すると、主の火が降って、焼き尽くす献げ物と薪、石、塵を焼き、溝にあった水をもなめ尽くした。**

**18:39 これを見たすべての民はひれ伏し、「主こそ神です。主こそ神です」と言った。**

**使徒言行録25章1～12節**

**25:1 フェストゥスは、総督として着任して三日たってから、カイサリアからエルサレムへ上った。**

**25:2 -3祭司長たちやユダヤ人のおもだった人々は、パウロを訴え出て、彼をエルサレムへ送り返すよう計らっていただきたいと、フェストゥスに頼んだ。途中で殺そうと陰謀をたくらんでいたのである。**

**25:4 ところがフェストゥスは、パウロはカイサリアで監禁されており、自分も間もなくそこへ帰るつもりであると答え、**

**25:5 「だから、その男に不都合なところがあるというのなら、あなたたちのうちの有力者が、わたしと一緒に下って行って、告発すればよいではないか」と言った。**

**25:6 フェストゥスは、八日か十日ほど彼らの間で過ごしてから、カイサリアへ下り、翌日、裁判の席に着いて、パウロを引き出すように命令した。**

**25:7 パウロが出廷すると、エルサレムから下って来たユダヤ人たちが彼を取り囲んで、重い罪状をあれこれ言い立てたが、それを立証することはできなかった。**

**25:8 パウロは、「私は、ユダヤ人の律法に対しても、神殿に対しても、皇帝に対しても何も罪を犯したことはありません」と弁明した。**

**25:9 しかし、フェストゥスはユダヤ人に気に入られようとして、パウロに言った。「お前は、エルサレムに上って、そこでこれらのことについて、わたしの前で裁判を受けたいと思うか。」**

**25:10 パウロは言った。「私は、皇帝の法廷に出頭しているのですから、ここで裁判を受けるのが当然です。よくご存じのとおり、私はユダヤ人に対して何も悪いことをしていません。**

**25:11 もし、悪いことをし、何か死罪に当たることをしたのであれば、決して死を免れようとは思いません。しかし、この人たちの訴えが事実無根なら、だれも私を彼らに引き渡すような取り計らいはできません。私は皇帝に上訴します。」**

**25:12 そこで、フェストゥスは陪審の人々と協議してから、「皇帝に上訴したのだから、皇帝のもとに出頭するように」と答えた。**



**指導者が変わると方針が変わるというのは往々にしてあります。アメリカの大統領が就任したとたんに国としての方針を大きく変えて、その言動で世界を混乱させているのは連日テレビや新聞などで報道されていて、私たちも目にしたり耳にしたりします。自国第一主義を掲げ、自分たちさえ、もっといえば自分さえよければそれでいいとの近視眼的なものの見方しかしないというのは危険なものであることを思います。私たちはそのような近視眼的なものの見方をするのではなくて、自分をはるかに超えるお方に目を向けて歩み、そのお方が何をなそうとしておられるのかに思いを向けて、そのお方を指し示す、そのような信仰の歩みをしていきたいと思います。**

**パウロを2年間カイサリアに監禁したフェリクスが退きました。一説によると彼は不正をしてその不正のために失脚をしたと考えられています。そのフェリクスの後任としてカイサリアに赴任したのがフェストゥスという人物です。フェリスクスとフェストゥス、名前が似ていてややこしいですが、新しく総督として赴任したフェストゥスはなかなかのやり手の人物だったようです。彼は2年間ほったらかしにされていたパウロの事に手を付けたのです。フェリクスとは大きく方針を変えて、そのために膠着状態だったパウロの状況がここで大きく動き出すことになったのです。**

**フェストゥスは着任して3日してエルサレムに行きました。彼は自分が管理を任せられているユダヤ教の指導者たちに挨拶に行ったのでしょう。ユダヤ人たちはカイサリアで監禁されているパウロをエルサレムに送り返して欲しいと懇願します。それはその途中でパウロを殺そうと企んでいたからです。しかしフェストゥスは「あなたたちがパウロを訴えたいならあなたたちがカイサリアに来るべきだ」と彼らの訴えを退けたのです。**

**そして、カイサリアに戻って来たフェストゥスは早速翌日にパウロの裁判を開いたのです。エルサレムから来たユダヤ人指導者たちは、前任者のフェリクスの前でのパウロの裁判と同じようにあれやこれやとパウロを訴えますが何も目新しいものはなく単なる言いがかりに過ぎなかったのです。**

**パウロは彼らの訴えに毅然と弁明します。8節です。**

**「私は、ユダヤ人の律法に対しても、神殿に対しても、皇帝に対しても何も罪を犯したことはありません」**

**パウロの弁明を聞いたフェストゥスはユダヤ人のご機嫌を取るためにエルサレムで裁判を受けたいかをパウロに尋ねます。するとパウロはまたもや毅然と答えました。10～11節です。**

**「私は、皇帝の法廷に出頭しているのですから、ここで裁判を受けるのが当然です。よくご存じのとおり、私はユダヤ人に対して何も悪いことをしていません。**

**もし、悪いことをし、何か死罪に当たることをしたのであれば、決して死を免れようとは思いません。しかし、この人たちの訴えが事実無根なら、だれも私を彼らに引き渡すような取り計らいはできません。私は皇帝に上訴します。」**

**「私は皇帝に上訴します」時のローマ皇帝は暴君と恐れられたネロです。パウロは一か八かの賭けをしました。ここで裁判を受けていても無罪放免にならないし、ローマ行きも進まない。皇帝に上訴して皇帝の元で裁判を受けたら自分は囚人という立場だけれどもローマに行くことができる。ローマ皇帝ネロの元で厳しい迫害を受けるかもしれない。しかし、パウロはその全てを共に歩んで下さるイエス様にお委ねしたのです。**

**それにしても思いますのがパウロの毅然とした態度です。総督がフェリクスからフェストゥスに代わりフェストゥスがどんな人かもわからない、どんな扱いを受けるかもわからない中でむしろ今まで以上に毅然とした態度で裁判で弁明しているように思うのです。**

**「決して死を免れようとは思いません」は「死ぬことを私は拒まない」という強い表現です。それはまるで「イエス様が十字架で死なれたように私も死にます。私もイエス様の御後を従って歩みます」と力強く語っているようです。**

**本日、私たちに与えられました旧約聖書の箇所は列王記上18：36～39です。**

**ここは18章の最初に「エリヤとバアルの預言者」と小見出しがつけられているように、神様によって預言者として立てられたエリヤとバアルという異教の神、いわば偶像を信じる預言者達450人が戦うという物語です。戦うと言いましても武力で戦うわけではなくて、厳密に言うと天地をつくられた私たちの父なる神様とバアルが戦う場面なのです。**

**物語の舞台は南王国ユダのサマリアの地です。サマリアは飢饉に襲われていて、イスラエルの人々は主なる神様を信じるけれども、バアルが豊穣をもたらす神であるので人々はバアルも信じていたのです。この状況に預言者エリヤは怒ります。**

**21節でエリヤは人々に「あなたたちは、いつまでどっちつかずに迷っているのか。もし主が神であるなら、主に従え。もしバアルが神であるなら、バアルに従え。」民はひと言も答えなかった。と記されています。「主なる神を信じるかバアルを信じるかどっちかはっきりしろ！」と迫るのです。そしてバアルの預言者450人と対決します。**

**彼らの対決は、祭壇を作り、そこで牛をいけにえとして献げるのですが、そのときに人が火をつけずに、それぞれ自分の信じる神が、火をつけてくれるようにと祈るというものでした。祈りを聞いて、祭壇に火をくだされた方が、本物の神であるというのです。まずバアルの預言者達がバアルに祈ります。朝から昼までバアルの名を呼び「バアルよ、我々に答えてください」と祈ります。しかしバアルは答えません。彼らの祈りはエスカレートし、剣や槍で体を傷つけ血を流すほどに狂ったように叫び続けました。しかし、結局何も起こらなかったのです。それもそのはずです。バアルなんてしょせん人間が作り出した偶像に過ぎませんから。**

**次はエリヤの番です。エリヤは祭壇を築き直し、雄牛を屠り、薪の上に載せて、薪の上に多量の水を流しました。そして祈りました。「アブラハム、イサク、イスラエルの神、主よ、あなたがイスラエルにおいて神であられること、またわたしがあなたの僕であって、これらすべてのことをあなたの御言葉によって行ったことが、今日明らかになりますように。**

**わたしに答えてください。主よ、わたしに答えてください。そうすればこの民は、主よ、あなたが神であり、彼らの心を元に返したのは、あなたであることを知るでしょう。」（36～37節）**

**すると主の火が下ってささげものだけでなく溝にあった水まで焼き尽くしたのです。それを見ていたイスラエルの人々はひれ伏して言いました。「主こそ神です。主こそ神です。」こうして人々は主なる神様への信仰の告白をしたのです。エリヤの毅然とした態度が迷う人々を「主こそ神です。主こそ神です。」との信仰の告白に至らせたのです。それは飢饉という困難な中にある人々に、エリヤはその困難な状況にばかり目を向けているのではなくて、ましてや偶像に心を奪われているのではなくて、「神を見よ！」「こんな状況だからこそ神を見るんだ！」「この世界を造り、あなたたちをつくり、あなたたちを愛して下さっているのは主なる神ではないか。その神を見よ！」と力強く神様を指し示しているのではないかと思うのです。**

**なぜ私が今日の旧約聖書の箇所でここを選んだのか。それはもちろん祈りの中で示されたのですが、このエリヤの対決での毅然とした姿と、裁判でのパウロの姿が重なって見えたからです。「神を見よ」エリヤは神様を指し示しました。天地をつくり私たちをつくり私たちを愛して下さっている神様を指し示し、「神を見よ」、「神を信ぜよ」と力強く証しをしたのです。裁判の場でパウロが毅然とした態度で指示したのは他でもない、イエス・キリストです。「イエスを見よ！」「この人を見よ！」と、「この命すら惜しくない、イエス様が私の罪のために十字架にかかって下さった、そのイエス様の十字架を見よ」このように十字架上のイエス様を見るように私たちに力強く証しをしているように思うのです。**

**「この人を見よ」「十字架を見よ」聖書は私たちに語ります。「主の十字架を見上げよ」と。それはそこにこそ私たちの救いがあるからです。私たちの罪の贖いのために十字架にかかって下さったイエス様。イエス様は十字架にかかられる時に「父よ、彼らをお赦しください。自分が何をしているのか知らないのです。」（ルカ23：34）と父なる神様に私たちのために執り成しの祈りをして下さいました。「わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになったのですか」（マルコ27：46）と十字架上で絶望の苦しみを受けられました。「父よ、わが霊を御手にゆだねます」（ルカ23：46）大声で叫び息を引き取られました。死の苦しみのどん底を味わわれたのです。もしイエス様が十字架の死で終わっていたらそれは敗北に過ぎません。死の悲しみに飲み込まれてしまった、真っ暗な闇しかこの世に存在しません。死で全てが終わるなら、バアルの神が預言者達の叫びに一切答えないように、そこには希望も喜びも慰めもありません。そこには絶望しかないのです。**

**しかし、神様は答えてくださるのです。神様はバアルではありません。父なる神様はイエス様を死から甦らせてくださり、絶望を希望に変えてくださったのです。復活されたイエス様は言われます「わたしの手を見よ。わたしの脇腹に手を入れよ。信じない者ではなく、信じる者になりなさい」（ヨハネ20：27）「わたしを見よ」「わたしを信ぜよ」復活されたイエス様は笑顔で私たちに語りかけてくださるのです。私たちは復活されたイエス様を見上げ、イエス様を信じて歩むのです。ここに私たちの希望があるのです。ここに私たちの慰めがあるのです。ここに喜びがあるのです。そして、ここに愛があるのです。**

**旧約聖書のサマリアの人たちは飢饉という困難の中で神様が見えなくなりました。現実の困難な苦しみの中で、バアルという偶像にすがろうとしたのです。それは私たちが困難な歩みの中で神様が見えなくなり、目に見える何かにすがろうとするの同じです。**

**諏訪教会の歩みは現実だけを見たなら困難な中にあります。礼拝出席者が減っている、経済的に厳しい、伝道をしても伝道集会をしてもチラシをまいても人が来ない。あれもないこれもない。もしその現実だけしか見ないのであれば教会は終わりを迎えるでしょう。目に見える何かにすがるのであればバアルという偶像にすがるのと同じです。**

**だからこそ、イエス様はそのような私たちに語りかけてくださるのです。「わたしを見よ」「わたしを信ぜよ」。預言者エリヤが指し示した、パウロが命を懸けて指し示したイエス様を見上げるのです。今こそ私たちは心を一つにして共に主を見上げるのです。**

**「この人を見よ、この人こそ、人となりたる　活ける神なれ」**